

SRID NEWS LETTER

No. 385 January 国際開発研究者協会 創設者 大来佐武郎

〒102 -0074 東京都千代田区九段南 1-6-17 千代田会館 5 階 FASID 内

URL: <http://www.srid.jp>

ミャンマーへの旅

SRID ジャーナルまもなくスタート

横浜国立大学 辻岡政男

インターネット幹事 小林 一

お知らせ

1. 幹事会 日時：2月6日（水） 午後6時30分から8時30分

ミャンマーへの旅

横浜国立大学

辻岡政男

出発

昨年末、12月22日(土)から12月30日(日)まで、ミャンマーに出かけました。出発前、ミャンマーの現軍事政権が国際社会から批判をあびている最中ですので、実際に旅行に行けるのかどうか、すこし気がかりでした。ミャンマー大使館にビザ申請した時、「ビザは発給まで2週間です」と説明を受けて、これは大変な国に出かけるのだなと思いました。

12月22日(土)、朝、成田を出発し、乗り継ぎ飛行機の関係で、バンコクで一泊しました。翌23日(月)の午後1時30分バンコク発、タイとミャンマーの国境の山を飛び越えて、1時間でヤンゴン空港到着。日本とミャンマーの時差は2時間半。ミャンマー現地時間は午後12時55分、気温30度。

ミャンマーの人々の仏教信仰

今回のミャンマー旅行の動機は、横浜国大に来ているミャンマー人留学生が、毎月、鎌倉大仏に参拝に出かけることに関心を持ったからです。一度、お参りに誘ってもらったことがあります。早朝、一般の観光客が集まる前に入場して、大仏の前に、お花、ご飯、水、ミルク(牛乳)、果物(イチゴとりんご)、ヨーグルトとサンドイッチをお供えして、30分ほど大仏の脇の石床に坐って黙想しました。ミャンマー人留学生が本当に丁寧にお参りしている様子を見て、普通の日本人のお参りの仕方との違いを感じ、その理由を現地ミヤ

ンマーで探してみたいと感じました。今回、実際にミャンマーを歩いてみて、留学生の気持ちが少し分かったような気がしています。

ミャンマーで名所と呼ばれるところは、ほとんどすべてが仏教寺院と仏像でした。「日本の観光はお寺めぐりばかりだ」と、外人旅行者が日本評をしているのを、読んだか聞いたことがあるような気がします。ミャンマーは日本以上でした。国全体がお寺の境内のようで、人間が仏像に囲まれて生活しているような印象を受けます。どこに行っても黄金色に輝くパゴダと、立派な仏陀の像に出会います。

ミャンマーの人々は、子供時代からいつも仏像を見て育つのでしょうか。ジーンズ姿の若者も、買い物籠を抱えたご婦人も、仏像の前できちんと座って深いお辞儀をしてお参りしています。座禅を組んでじっと瞑想している人もいます。ヤンゴン在住のミャンマーの友人は、黄金色の大パゴダで有名な、シュエタゴンパゴダに、1週間に2度お参りに行くそうです。日本に留学に来て、なるほど月に一度鎌倉大仏にお参りに行くのも不思議ではないと納得しました。

お寺を回っていて、ひとつ気がつきました。ミャンマーの仏像はニコニコした表情です。横になっている仏陀の涅槃像など、そのニコニコ表情が特徴的で大変印象に残りました。写真を添付します。日本の仏像は、考え事をしているような難しい表情をしているのが多いのではありませんか。

訪れた土地について

ミャンマー国内では、首都ヤンゴンを出発点として、北部の古都マンダレーとパガンをめぐるヤンゴンへ戻るルートを一週間かけて旅しました。

ヤンゴンはミャンマー最大の都市。イギリスが植民地統治の中心として建設した町で、現在も英国風の大きな建物が市内のあちこちに残っています。繁華街はさすがににぎやかで、ショッピングセンターのボーチャーアウンサン・マーケット辺では、歩道にも露店がずらりと並んでいて、買い物客はその狭くなった通りを押し合いへしあいしながら歩いています。一方、街中を走っている自動車はほとんどが整備不良の中古車で、それが排気ガスを撒き散らすので、息苦しいほどでした。

マンダレーにはヤンゴンから飛行機で北へ一時間少々で到着。ここは19世紀中旬に栄えた王朝があったところです。町の中心に、元の王宮の外壁が水を湛えた堀に囲まれて残っています。このマンダレーから中国国境まで自動車ですら6時間の距離で、近年、マンダレーはこの陸路による中国との貿易の中継点としての商業活動が大変盛んになっているそうです。市内の中心部は車やバイクが絶え間なく走っており、やはり排気ガスで空気が相当汚れていましたが、郊外に出れば、イラワジ川の川べりは広々とした田畑があり空気が良く、道路では馬や牛が荷車を引っぱったりして働いているのどかな風景に出会いました。

パガンはマンダレーの南西部、飛行機でマンダレーから30分。11世紀から13世紀にかけて繁栄した王朝のあった所です。今もいたるところに、仏教寺院、パゴダ、仏像があり、ミャンマーを代表する観光名所です。ここでの寺院めぐりは、馬車に揺られながら行きました。ゆったりとした馬車の旅は、この遺跡の村を移動するのにぴったりで快適でした。

ミャンマーの人たちは、大変穏やかで親切です。路上で物乞いの人も非常に少なく、ホテルではチップを遠慮する従業員に出会って、感心したこともしばしばです。また、顔立ちでは日本人によく似た、ぽっちゃりとした丸顔の人も良く見かけました。不思議な気がしましたが、長い歴史の中で、ミャンマーが周辺の国々との交流があった証拠でしょう。

ミャンマーの課題

ミャンマーは、最近、海外からの観光客が激減したようです。「特に2007年9月以降、日本からの団体旅行が全部キャンセルになりました」と、旅行会社の人と話していました。観光産業で生活している人が多い国ですから、観光客が減ると大変です。

ミャンマー人や日本人の友人に、機会があるごとに、「ミャンマーの発展の鍵は？」と聞きました。異口同音に、「現在の軍事政権のままではむづかしい。政府には経済政策がなく、国民は言論の自由すらない。アウンサンスーチーさんが自宅監禁から開放されない限り、国の展望がない」という答えが返ってきました。

確かに入国早々、外貨交換レートが三重になっているのには大変驚きました。公定レートは1米ドルがミャンマー通貨6チャット、公認レートは1米ドルが400チャット、そして、実際にお金が動いている市場レート、いわゆる闇レートは1米ドルが1250チャットです。過去一度だけ、同じ経験をしたことがありました。20年ほど前に勤務したアフリカで、やはり軍事政権のスーダンでした。どこか経済運営に共通点があるのでしょうか。

情報関係では、週刊誌を発行している人から聞きましたが、毎週発行前に2日間、政府の検閲を受けねばならないとのことです。また、ミャンマーは大学卒の初任給が約1万円の国ですが、携帯電話一台を買うのに3万円もかかり、その上、政府の許可が必要ということ。いろいろ規制があるようです。

一週間の旅でしたが、留学生OBと旧交を温めることができ、土地の案内もしてもらい、貴重な経験が出来ました。留学生OBは、母国に戻って責任ある立場についている人たちです。日本で見ていたより、ずっと自信にあふれていました。

ミャンマーは現在の諸問題を克服して今後どんな発展を遂げるのだろうか、旅で会った人々の顔を思い浮かべながら帰途につきました。



男子10才の仏教通過儀礼



釈迦涅槃像

SRID ジャーナルまもなくスタート

インターネット幹事 小林 一

今年度当初から発刊へ向けて準備を進めてきました SRID ジャーナルが、まもなくスタートする運びとなりました。今年度よりインターネット幹事になっていただいたケンネ先生のお力により概ねの形が整ったもので、以下のアドレスにアクセスすることにより、サイトを見ることができます。

<http://www.sridonline.net/>

公式スタートは、改めて通知いたしますが、ジャーナルは、会員のみなさまの経験と見識に基づく国際開発についてのご意見を、国の内外に発信していく場です。このジャーナルが、インターネット上で世界へ開かれた SRID の窓口となり、国際開発の進化に一役買うことができればと思います。奮ってご寄稿されることを期待いたします。

皆様からの寄稿のほか、懇談会やシンポジウムの発言も掲載していくようにいたしますので、会員はジャーナル上で SRID での議論の流れをご覧になれるようになります。特に、海外会員の方で、直接シンポジウム等に参加できない方々にもネット上で議論に参加していただけるのではないかと期待しているところです。

どうぞよろしくお願いいたします。

サイトをご覧になってのご意見等は、インターネット幹事までお寄せいただければ幸いです。

「SRID ジャーナルを完成するためには会員の皆様の協力が必要と思いますので是非アクセスしコメントをお願いいたします。

ジョン・賢根」